文学的《上総》の光彩

――日本文学持ち歩き（七）――

竹内清己

序

文学的《上総》という言葉が私の胸に来て、それに応える一年となった。

千葉のなかで旧国名でいえば上総に生まれ、上総に育った安藤幸輔、作家葉山修平の文学を、今年（二〇一八）の研究テーマの中心に据るたことに決した。昨年末、一宮館で毎年五月に催される「芥川龍之介文学碑・小高倉之助歌碑歌碑」碑前祭に「卓話」を依頼されたことに由来する。

千葉は、半島の先きから安房、上総、下総の三国よりなる。昔の畿内からの遠近からいって、東海は武蔵に下って上総、下総の順となるかと思われる。越前、越中、越後、あるいは上野、下野の順のように。しかし、それが武蔵の先に下総、上総となっている。これは、古代、武蔵野が丘陵、湿地帯多くむしろ相模から海路でまず上総に渡り、上総から下総へ、下総から常陸、あるいは武蔵に入って北上するルートが主であったことによるらしい。そんなこともあってか、房総はまず上総、上総から下総、安房へのルートが考えられる。

顧みれば、私は、千葉大学の学生になって、下総の千葉に住んだ。最初の赴任先が上総一ノ宮の一宮商業高校で、一宮に住み、さらに森安理文の門下に入って東浪見、太東、三門に下って森安邸に住んだ。その後の下総の今日に至る暮らしはいまはたどらない。

ただ、いまになって、一度も住まいを千葉以外に移したことがないことにはたと思い至った。『旅の日本文学』を出し、流浪に憧れながら、定住に生きた生涯となりつつある。運命は宿命になりつつある。それは職業や人生上の境遇がしからしめることではあったが。かつて「旅寓の文学風土――千葉」という一文を草したことがある。タビノカリズマイ。旅人をしばし憩わせる風土が千葉にある。一体に開明で肯定的生命は、まさに葉山修平に代表される。葉山との文学的交流を果たし、本格的に捉え直そうとこころみての実感である。それは結果であり結論であった。文学的《上総》の光彩は、愛語・利生におもむく。

芥川龍之介と葉山修平

――『小説 芥川龍之介』の世界・文学的《上総》の光彩――

プロローグ

もはや幽明境を異にし彼岸の人となった葉山修平さん、
遠い世界でどうか私の繰り言をお聞き届けください。

一　『小説　芥川龍之介』の世界

1　プロット・モチーフ――人物・時間・空間・事件

葉山修平『小説 芥川龍之介』（二〇〇三・一二龍書房）は、「**水のうえ**」「**夜来の花**」「**彩色玻璃**」の三部よりなる。

第一部「**水のうえ**」（「芥川龍之介」（洋々社一九九二年四月）「1」は、次のように書き出される。（人物・時間・空間にすべて傍線をほどこす。以下同じ。）

女はなかなかやって来なかった。大川の上に浮かべた屋形船に彼を残して、それじゃ、旦那……と老船頭は竿を持ちかえると、黄色く濁った川波のうえを辷るように岸の船宿へ小舟を返していったが、あれからもう三十分は経っただろうか。いや、小一時間は経っているかもしれない。

人物は「女」。「女はなかなかやって来なかった」――、「女」を待つということ、待つ「女」はなかなかやって来なかったということが、この『小説』の世界を開く。「女」は、この『小説』の第一モチーフを編成する。空間は「大川の上」。「大川の上に浮かべた屋形船」。「大川」、すなわち隅田川の「水」が、「女」につれて第二のモチーフをなしている。これが全ての舞台であって、この舞台から、「屋形船」から、主人公の「彼」が、降りて岸に上がることは、一切ない。「それじゃ旦那……と老船頭は竿を持ちかえると、黄色く濁った川波のうえを辷るように岸の船宿へ小舟を返していった」と、「彼」は、「老船頭」に「旦那」と呼ばれる人物であり、「老船頭」が、「川波のうえ」を「岸の船宿」へ小舟を返してから後、「あれからもう三十分は経ったろうか。いや、小一時間は経っているかもしれない。」という。「あれ」から「三十分」、「小一時間」という時間の経過のうちに、「彼」が、体験した空間の眺めが、次のように映し出される。

川面には夜と昼との境めに生まれる靄（もや）が立ちこめてきていた。先ほどまで残照のなかに、やわらかく揺れている葦にとまっていた黒蜻蛉（おはぐろとんぼ）の羽が夢のように見えていたが、いつのまにか葦の繁みは遠い風景となって薄墨色に霞んでいた。彼一人を乗せた小さな屋形船は、たぷたぷと舷を叩いている水音につれて、少しずつ上げ潮にのって動いているようだった。そういえば、さっきまで芝

居の書割のように見えていた岸の土蔵の白壁が、遠く小さく薄暮の霞のなかに溶けこもうとしていた。そして柳やアカシアの間にくすんで見えた格子戸造りの家々には、小さな灯がぽつりぽつりとにじんだように点りはじめ、その暗い家々の空に赤い月が大きな瓦煎餅のようにあがっているのが、巻き上げた簾のしたから眺められた。

映画の印象的なワンシーンのように、細部まで時空間が点綴されている。そうして、「こうした風景は、彼を遠い思い」にさせたと、『小説』の主旋律が繰り出される。「思い」の連鎖が、導かれる。（引用文中の「思い」にすべて傍点をほどこす。以下同じ。）

こうした風景は、彼を遠い思いにさせた。それは、甘く切ない思いだった。知らずに涙ぐんでくる思いだった。郷愁、そんな言葉で括ることのできない、彼の生の根源とも、彼の文学の原風景ともいえるものだった。彼は「大川の水」への熱い思いを、「自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て椎の若葉に掩われた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、すぐあの広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである……（中略）……自分はどうして、こうもあの川を愛するのか。あの何方かといえば、泥濁りのした大川の生暖かい水に、限りない床しさを感じるのか……」と、いくぶん感傷的に記したことがあった、あれはいつのことだったろう。

「遠い思い」は、「甘く切ない思い」であり「知らずしらず涙ぐんでくる思い」だった。それは、「郷愁」、そんな言葉で括ることのできない、「彼」の「生の根源」とも、「文学の原風景」ともいえるものだった。「「大川の水」への熱い思い」を綴った「大川の水」の一節の回想によって、大川端、家、横網の小路、百本杭の河岸……「水」の床しさが引き出される。「あれはいつのことだろう」と「いつ」という時間が引き出される。つまり、『小説』は、「彼」＝芥川龍之介の「思い」の連鎖につれて引き出される人生的煩悶、それはあぶり出された作家芥川像であり、作家葉山修平の芥川論でもあった。そうして、

「彼は三年ほど前から、山手の郊外の田端の高台に住み、雑木林のかげになっている書斎で読書三昧の生活を送るようになっていたが」、と「彼」の回想の時空間が現前化される。「月に何度かは川のほとりにさまよい、大川のにおいを体中に吸い込んで、やっと失われた自分を取り戻したような気持ちになる」と自己回復の「いま」に結ばれる。「いまの彼は――」と、「何により雑誌社の原稿締切に追われて一分の時間さえ惜しまなければならない状態だった。ようやく校了となって、八月に出版される予定の短篇集『沙羅の花』でも慌ただしい思い」があったし、「妻は二人目の子を妊って臨月近い腹を抱えていたから、これにも人知れぬ気遣いをしなければならなかった。それに秋の展覧会の出品作として、小穴隆一が肖像画「白衣」の制作中であり、そのモデルである彼は、緊張した時間を過ごさなければならなかった」と。

そうした「思い」は、「忘れようとしても深く心の中に食い入って、不断に彼を悩ませる存在の人たちや、現実の生活を脅かしてくる人たちとの関係」も焦燥感となって襲ってきていた。「それなのに、いや、それだからこそ」、「妻に隠れ」「小穴隆一にも気どられぬようにして、憑かれたように大川に来ないではいられなかった」と。

さらに、「同じ高台に住んで行き来している室生犀星には、いっそう知られたくない気がした」のだ。なぜか。そこから、室生犀星が、「幼少時代の犀川への思い」や数奇な出生と生母への恋慕を告白したとき、「隅田川に対して彼も同じ思い」を持っていることを話し、「犀星との出会いが単なる偶然でないことを確かめ合った」、にもかかわらず、「しかし、犀星が裸の自分を見せた」ようには、「黒い雲のように覆っている出生や母への思い」を、告白することができなかったからだ。それでいて、「別な形ではっきりと自分にいい聞かせ、人にも知らせたい思い」があった。それが、新しい年を迎えてから急に強くなってきたのはどうしてだろう。「新しい年」を迎えて、「春を迎えると彼は、それまで二階の書斎に掲げてあった菅忠雄の筆になる「我鬼窟」にかえて、下島勲の筆になる「澄江堂」の扁額を掲げた、「〈我鬼〉は師漱石の文学の底流をなす〈自我〉を寓したものと人はいい、自らも心に期したものがあったが、もう一つの秘め事として、〈鬼〉の中に彼を生んだ母への特別な思い」を込めたものだったのだ。こうした「思い」は、「女」から「女」の最初である「母」へ連鎖する。「彼はこの数年は、好んで「河童」を描きつづけてきたが、むろんここにも母への秘めた思い」が込められていた。「彼」の中では「鬼も河童も「母の世界」へ、そのまま通じてゆく象徴的な存在」だったのだ。小穴が、「今度は澄江という女に惚れたのかね」といったが、小穴のいうことも、「まんざら的外れというのではなかった」。ここには、「女への思い」が秘かに匂い立っていることも否定できないことだった。

こうした「女」への「思い」は――第一のモチーフとして纏綿し、これまで「彼」と関わった「女」は、「隠すより顕われるはなく、文壇のゴシップになってしまった」が、「〈大川の女〉だけは格別でなければならなかった」、「女」は、「〈マリア〉」だった。

この〈大川の女〉―〈マリア〉。これこそ、『小説』のオリジナルだった。「世間知らずで思い」込み、の激しい「彼」は、「これまでにも何人かのマリアを見てきた」のだが、「この女こそ正真正銘のマリアに思われた」という。この「女」の形象は、この『小説』世界の金字塔であって、従来の芥川研究に照らして、創造である。創造であることが真実である金字塔だった。そんな「女」など芥川にはいなかったと主張することを、無限に許す、それは創造である。誕生と言っていい。「女が来るまで待とう」「蚊に食われながら女を待つのもいい」、と「彼は自分の思い」つき、が気にいった。

オマエ　マチマチ　カヤノソト…ふっと口をついてでた文句に、おれも都々逸型だな、と彼は一人で苦笑した。

この都々逸は、近松「心中天網島」の「天満神の名とすぐに天神橋と行き通ふ、所も神のお前町」と紙屋治平・小春道行心中、これをもじった都々逸「こちゃえ節」の「お前まちまち蚊帳の外」と引く。そうして、「そういえば、久米正雄が、オレは英語でやってみるよ」と、「あれはたしか学生時代に、九十九里海岸一宮館の離れに滞在したときだった」と、芥川の〈青春の一宮〉に結んでゆく。この手口は見事というよりない。「そのとき」、「彼」は、「粋な道行の三味線に合わせて一中節を歌ってみせた祖母の話などもし、自分も母から、粋な血を受け継いでいるかもしれない、などと話した記憶があった。彼の育った芥川家は」と、「祖父の代までお城のお坊主をしていたが、一家は歌舞伎や寄席などに気軽に出かけ、遊びを楽しむことを知っていた珍しい家」だったと、芥川の下町、隅田川界隈が、九十九里海岸、「一宮館の離れに滞在したとき」に結んだこと。これは、芥川文学への独自な聯繫であって、文学的《上総》の光彩だったと、考えられる。

さらに、「女は来ないかもしれない、という思い」が、ふと彼の脳裏をかすめ、すると荘子の「尾生女子与期於梁下」が思い」浮かべられ、「荘周が夢の中で蝶となった話を思い」出し、「すると、何の脈絡もなく、我孫子に住んでいる志賀直哉を、近日中に小穴隆一と訪ねる予定になっていることが思い」返される。

著名な芥川の志賀訪問の意味が、「毎月の締切りに追われ、神経衰弱気味になっても断わることのできない彼は、一月号に「藪の中」「俊寛」「将軍」「神神の微笑」、そして三月号には「トロッコ」を発表していた」とあり、「直哉はもう三年も何も書かずに悠々としてた」、それへの敬意であり恐怖であることが追尋される。

ここで場面は、ようやく展開する。

「彼は急に疲れを感じた。ごろりと片肘（ひじ）を突いて横になった。巻き上げた簾の下から見える月」がと、「月の光が眩（まぶ）しく感じられて、彼は目を閉じた。閉じた目蓋（まぶた）の上に月の光がぽっと明るく感じられた。疲れが神経にきているようだった」、「彼は身を起こすと簾を下ろした。両手を首の下に組んで仰向けに寝転ぶと、静かに目を閉じた」と。『小説』は「彼」の疲れと神経を注視し、わずかな「彼」のファクトをも見逃さず月下に照らし出す。そうして、視覚から聴覚に移って、「船底に触れる水の音と舷を打つ波の音が、快い不思議な動きを体に伝えて来た」、「彼が生まれる前から知っているこの親しい響きは、母の胎内でゆらゆら揺れながら確かに聞いたものだった。生まれる前の彼は長い時間をかけて、薄明るい柔らかなトンネルの中を、ゆるやかな暖かい流れにのって漂っていた」と、「そのとき」、

そのとき彼は、どこからともなく聞こえてくる、声とも音ともつかないくぐもった響きを聞いていた。そして長いトンネルの中を流れにのって下っていったが、とつぜんめくるめく（傍点本文）ばかりの明るい光のなかへ投げ出された。その瞬間、彼は体内の空気を吸い込むと、思い切り力を込めて声をあげた。誕生の第一

声だった。

こうして、「1」は閉じられる。彼＝芥川の誕生記憶という仮構が持ち込まれる。「2」以下、冒頭のみを引いて、プロットをたどる。

「2」

彼は自分が生まれたときのことを記憶していた。いや、正しくは、記憶していたことに気づいた、というべきかもしれない。それは彼の深いところに、ぼんやりと眠っていた記憶が、大川の風景の中で、とつぜんはっきりした形をもってきたということだった。

大川、回向院の墓地、子守の「つうや」とともに遠い日の記憶が思い出される。

――ぼくは、川から生まれてきたの？

――ぼく、生まれる前から水の上に浮いていたの……それから長い暗い、トンネルをくぐって、川の水に浮かんだの……

――坊っちゃまは、カッパに魅入られたんでございますよ。蛙とカッパは親戚で、蛙はカッパのお使いですからね。

「3」

それは、もう二十数年前の思い出の風景だった。〈つうや〉と幼い彼のすがたが、瞼にありありと映し出されて、彼は涙ぐみたいような気持ちになった。〈つうや〉は、やがて嫁ぐために彼の家から去っていったが、盆暮には必ず顔を見せた。

「お母さん――と彼は、眠っている間に呼んで、自分の声で目が覚めることがあった。いま、船底で囁いている、とんとん、ぴちゃぴちゃ……という波の音が、彼を呼んでいる母の声のように聞こえてきた。

――次郎吉さん、と今度はすぐ下の川のなかから聞こえてきた。

え？　彼は、遠い夢の世界から引き戻された。

「次郎吉さん」と今度ははっきり女の声だった。あ、おまん、と彼は、口の中でいった。

待っていた女がやっと現れたのだと、思ったとき、いきなり白い顔が月明かりの中から現れ、舷に両手が掛けられた。

ラストは、

「よく溺れなかったな」と彼は、水の中をくぐっている女の体の動きを思い描きながらいった。

「ふ、ふ、ふ、溺れるもんですか」と女は小さく笑ってから、「ワタシャ九十九里アラハマソダチ……」と声色を使っていった。

彼は、後をつづけて……トイウテイワシノマゴジャイィ…と、これも声色でいった。

「ばかねえ、次郎吉さんてェ…」と女は弾けるように笑うと、彼の方へ体を寄せてきた。

こうして第一部は閉じられる。河童、母、つうや、おまんの連関。大川、水、九十九里の連鎖が引き出す現在とは、何時か、それがおよそ特定される。資料の『年表』（鷺只雄編著『年表読本芥川龍之介』

以下同じ）で照合確認する。

大正一一年（一九二二）三〇歳。『沙羅の花』の出版は八月一三日だから、それ以前、七月二七日、小穴隆一と我孫子に志賀直哉を訪ねる。とある数日前、八月『六の宮の姫君』脱稿は七月二〇日頃、以降、つまり、『小説』の設定は、その間の日の「夜と昼との境め」の「薄暮」ということになる。

第二部**夜来の花**（「芥川龍之介」（洋々社）一九九二年四月）

「1」

彼に身を寄せてきたと思った女は、あ、だいぶ流されているのね、と身を起こして、体を屈めながら艪の方へ出ていった。

初めて女の屋形船にのったときに、艪を漕ぐ女の手練に彼は舌をまいたものだ。

「一か月ほどまえのことになる。「中央公論」と「サンデー毎日」から依頼された原稿を、間歇的に襲ってくる歯の痛みに悩まされながら、ようやく仕上げて記者に渡したあとだから、二十五、六のことだったろう」。つまり、『年表』で、七月『庭』（中央公論）脱稿は六月二〇頃、原稿を渡した「あと」は六月二十五日か六日か、『小説』の第一回の屋形船体験の「まえ」ということになる。

「2」

――旦那、お供をさしてやっておくんなさい。

男の声に、彼は自分に返った。そして慌てて、彼の瞼に残像のように見えている深海魚の女たちを追い払った。彼は、男に見透かされたかもしれないと思ったが、内心の狼狽を隠すように、わざとらしく女のしなやかな体に目を光らせながら、男にいった。

――これが船頭か？

「3」

彼は、女の生れ育った海の生活を思い描くことができた。それは彼の少年時代とも重なってくるものだった。

彼は南房総の勝浦で夏を過ごしていた。それが彼が十二歳で小学高等科二年になった夏から二十歳になるまで、ずっと続いた夏の生活だった。

勝浦、御宿、九十九里海岸で地引網漁。「そして――それに混じっていた少女の一人が、太陽と潮の香を吸い込んだ体のまま成長し、屋形の艪を漕いでいる女に重なって」「あるいは――大原の海に漕ぎ出す乗合いの釣船の艪を漕ぐ船頭に従って、ときには艪を握らなければならなかった娘が、流転の末に大川の屋形で夜を過ごさなければならなくなったのだ、と想像してみた」と。

「4」

彼は隣人の香取秀真から、ステッキの握りを二つ贈られた。

「女」は「いったい、旦那は何をしている方なんですか？」「じゃあ、遊び人なのね」と。「彼」は大泥棒さ鼠だよ次郎吉。「おまん？」「いい女で、えらい女に、お万の方というのがいた」「――へえ、でも女

はみんな、おまん（本文傍点）なんだ……昔の人はイキだったんですねえ」

「5」

そして――あれから一月たっての今夜だった。やっと「魚河岸」と「六の宮の姫君」を「婦人公論」と「表現」の記者にそれぞれ渡し、「鷗外先生のこと」を「新小説に書いて大川にやってきたのだが、彼の精神的支柱としての〈母〉の存在であった先師漱石につづいて、〈父〉の存在であった鷗外が、この九月に亡くなったのだ。

「なにもかも、一ヶ月前の夜と同じだった。月の明るさも、艪を漕ぐ女の姿形も……」、「違うといえば、女が泳いで舟にやってきたこと……」。さらに、「F子を、彼は三年前に知った。岩野泡鳴の「十日会」に居合わせた彼女に忽ち囚えられた」と、「彼は歌人である秀しげ子を〈狂人（FOU）の娘〉という意味で、〈F子〉とひそかにいっていたのだが、欲望から逃れる望みをこめて、あるときいってみたことがあった」と回想する。

「6」

この一、二年、彼は河童に凝っていた。というより、幼いときに母から聞かされた河童の話が、急に身近に思われたのだった。

「友人で画家の小穴隆一へのはがきに、河童の歌を送りつけたこともあった。

短夜の清き河原に河童われは人を愛（かな）しとひたに泣きにけり」

「大川のほとりに立って、〈愁人〉と密かに呼んでいた人妻F子の肌を慕ったものだった。小柄で、固太りをした彼女の肉体が、こまかく彼の肌に顫えを伝え、彼は恍惚の境にさまよい、別れたあとも感触がうずくように蘇ってきてどうにもならなかった。彼は泣きたいほどの切なさに身を焦がした」。「大川の河童となった彼は、女河童となった彼女との愛のかたちを思う」のだったと。河童を通しての芥川と秀しげ子の「愛のかたち」には、比類がない。

第三部**彩色玻璃**（「雲」龍書房二〇〇二年九月～一二月）

「1」

船が少しずつ向きを変えているのか、月が屋形船の庇に半分ほどかかって見えるようになった。

「2」

彼が斎藤茂吉の『赤光』に心魅かれたのは、彼のつきあった〈女〉の面影をそこに見ただけではなかった。

茂吉が精神科の医師であることが、彼の〈母の狂気〉への思いとかさなって、無関心ではいられなかったのだ。

「3」

彼が南部修太郎と〈F子〉の関係に気づいたのは、湯河原へでかけたときだった。いまとなれば一年まえのことになるが、十月の初めから十日ほどの予定で、彼は南部修太郎を誘って中屋旅館

に宿をとった。

「夜は興に応じて俳句をつくりあった」。連句を巻きつつ、やがて

「（スタンドを消せばほのかな夜の明かり）

背中掻きやる閨（ねや）の睦言　（六句―修）」

と修太郎、

「〈恋の句〉か。なるほどね」

と、彼は言って、会話は、

「キミにも、背中を掻いてやる女性がいたなんてね」

ふっと彼は、南部修太郎の相手の女が、〈F子〉にかさなって思い浮かべられた。背中を掻かせる女が、そう多くあるとは思えなかった。

彼は何人かの女とつきあっていたが、背中を掻いたり掻かせたりというのは〈F子〉がはじめてだった。」

と、万世橋の旅館に語り合った夜のことに思い当たるとはシリアス。

「4」

舟底を洗う波の音は、彼の思いをいっそう深いものにした。

南部修太郎が、執拗なまでに彼の「南京の基督」にからんできたのは――まったく、からんできた、としかいいようのないことだったが――〈F子〉を介在させたときに、はじめて納得できることだった。

「彼は、自分が梅毒でなくとも、何かの性病にかかっている気が突然したのだった。それと、母親のことが頭をかすめた。母の狂気は何かの病菌に犯されたのかもしれない、という思い」だった。「作品『藪の中』は〈F子〉との決別を意味しているのだった」「何よりも彼は、「藪の中」が、推理小説ふうに犯人を特定してしまうことを避けたかったのだ。あくまでもこの作品は心理の葛藤を描いたものであり、〈女〉の不思議さ――所有されているものから逃れて、別の束縛を求めるが、またその束縛から逃げ出したいという〈人妻〉という存在の不思議さを描きたかったのかもしれない、などと他人事のように彼は思ってみた」と。

「次郎吉さん、まだお酒ある？」

「ああ、おまんか」

彼はあわてたようにぐいのみを口に持っていった。

「あら、お酒がないじゃありませんか」とおまんが、抱瓶（だちびん）を取り上げながらいった。

「うん……それにしてもいい月だねえ…」と彼は、改めて庇にかかった月を見あげた。

「あら、いやだ、次郎吉さんたら、ちっとも月を見ていなかったじゃないの」

そうだったかな、と彼はおまんと声をあわせて笑った。

船の向きが変わって月の光が二人を照らしはじめた。

と、『小説』は閉じられる。

小説成立の四要素〈だれが、どこで、いつ、どうした〉

○だれが（人物）「彼」＝次郎吉＝芥川と「女」＝女船頭＝おまん。回想の中の人物。

○どこで（空間）隅田川の上　屋形船の中　回想の中の空間。

○いつ（時間）薄暮　一か月ほど前、大正十一年六月二十五、六日と数日後の七月二十七日。回想の中の時間。

○どうした（事件）現在は「彼」と「女」とのどこ、船中でのやりとり、ゆきあい。回想の中での出来事の連鎖、文学的思い、河童連想など。それらは葉山修平の出自・文学的《上総》からくる光彩でもあろう。その光彩は、隅田川、東京への愛語・利生であったと考える。

2　「彼」の「思い」の中のテクスト

ここで「彼」＝芥川の「思い」の中で想起されるテクストの幾つかをたどる。これを芥川研究の一冊・鷺只雄『年表』と照合しつつ。まず、

○「大川の水」（大三・四）

「彼」が「「大川の水」への熱い思い」を記したことがあったと回想する「自分は、大川端に近い町に生まれた」の「大川端に近い町」とは、『年表』によって、「東京市京橋区入船町八丁目一番地（明治元年以後、外国人居留地ないしはその予備地であった。明治三二年居留地が撤廃となり、京橋区明石町に編入された。現在は中央区明石町一〇―一一、聖路加病院のあたりになる）」で、「生まれた」とは、明治二五年三月一日。「家を出て椎の若葉に掩はれた、黒塀の多い横網の小路をぬけると、直あの幅の広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出る」とは、両国。「一〇月二五日（龍之介の養子入籍に関する書類には「十月中頃」ともあり、また出生一〇カ月後の翌年一月とも考えられる）、実母フクが突然発狂し、龍之介はフクの実家本所区小泉町一五番地（墨田区両国三丁目二二番一一号）の芥川家に引き取られた」。その家からの川筋や河岸の大川である。また、「彼は三年ほど前から、山手の郊外の田端の高台に住み」とは、明治四三年「一〇月、芥川家は本所小泉町から府下と豊多摩郡内藤新宿二丁目七一番地（新宿区新宿二丁目）の耕牧舎牧場のわきにあった実父新原敏三の持ち家に転居」後、大正三年「一〇月末、新宿から北豊島郡田端四三五番地（北区田端）に家を新築し、転居する」、大正五年「一二月一日、海軍機関学校教授嘱託（英語）に就任」、鎌倉に下宿したりしたが、大正七年「二月二日、塚本文と田端の自宅で結婚式をあげ」、鎌倉に住んだが、大正八年退職し「四月二八日、鎌倉を引き払って田端の自宅にもどり、終生の家となる」とある。その三年後、すなわち大正十一年である。

「雑木林のかげになっている書斎で読書三昧の生活を送るようになる」とある、その「いま彼」が「月に何度かは川のほとりをさまよい、大川のにおいを体中に吸い込んで、やっと失われた自分を取り戻したような気持ちになるのだった」というのである。

これは完璧に虚構であって、しかもその虚構にあって、芥川の新たな真実の世界が現れる。書簡から

○明治三十九年八月七日　勝浦から　芥川道章宛（絵葉書）　一四歳
「正午無事着身体さまで疲労を覚えず　御安心下され度候　八月七日午後六時　勝浦ニテ　龍之介

○八月九日　小湊から　芥川とも宛（絵葉書）
「本日小湊ニ遊ビ日蓮上人ノ跡をヲ尋ヌ」もう一通芥川ふき宛「誕生寺ニ遊ビ清海楼ニ昼飯ヲ認ム」

《青春の一宮》二夏

○大正三年八月六日　千葉県一の宮から　菅虎雄宛
「一宮の海は波高く砂荒く僅に三里を隔てたる大原さへ此処に比すれば寧雅致なる感有之候海岸も砂丘多く所々に弘法麦と浜防風との青を点ずるも荒涼たる観をなすに止り候」

○八月三十日　井川恭宛
「町の中央に玉前神社と云ふ玉依姫の命をまつつた社があつて　その左右に五六町づゝ町が開展してゐるのだが　夕方散歩をすると沢蟹が砂地の往来をもぞ〳〵と這つてあるく程さびれてゐる」「僕のとまつてゐた家はその数の少い瓦葺の中で更に少い二階家で且一の宮に三軒しかない土蔵づくりの家であつた」「そこにゐる間中　本は殆どよまなかつた　歌も殆つくらなかつた　唯ごろ〳〵して論語をよんでゐた時々涙が出る程感心した所があつた」「曾点が一番なつかしいかと思ふ」「曾点が独り「暮春には春服既に成る　冠者五六人　童子六七人沂に浴し　舞雲に風し　詠じて帰らん」と答つたのを何よりもゆかしく思つてゐる　孔子が喟然として「我点に興せん」と云つたのも無理はない」「すべての煩悩を脱離した　清浄な心もちが何時となく心の底からにじみ出すやうな気がする　論語のおかげで僕も大分ＭＯＲＡＬＩＳＴになつた」

＊論語巻六　先進十一の二十六　芥川の『春服』に照応。

○大正五年八月十七日　井川恭宛

夜をあさみかなしかる子はおち方の空をながむと花火見にけり
わが恋もかかれと見守（みも）る遠花火しかすがかなし暗にちるとき

＊「わが恋」は、『年表』に大正三年「幼なじみで初恋の人吉田弥生に二度目の手紙を書き、やがて結婚を申出るが」とある弥生か、大正五年「また、昨年末から結婚相手として考えはじめた塚本文と正月に歌留多をとったりして積極的に動き」とある。

「○今日から一の宮へゆく　九月上旬までゐるつもり　以後は千葉県長生郡一の宮町海岸一宮館へ」

○八月二十一日（年月推定）井川恭宛
「一の宮の自然は rough な所がいい Dune なんぞアイルランドのものにかいてあるやうなのがある。夕方は殊にいい
　砂にしる日のおとろへや海の秋」

○八月二十一日　夏目漱石より　久米正雄・芥川龍之介宛

「今日からつくつく法師が鳴き出しました。もう秋が近づいて来たのでしょう。私はこんな長い手紙をただ書くのです。永い日が何時までもつづいてどうしても日が暮れないという証拠に書くのです。そういう心持の中に入っている自分を君らに紹介するために書くのです。それからそういう心持でいる事を自分で味って見るために書くのです。日は長いのです。四方は蝉の声で埋っています。以上。」

○八月二十四日夏目漱石より　久米正雄・芥川龍之介宛

「この手紙をもう一本君らに上げます。君らの手紙があまりに溌剌としているので、無精の僕ももう一度君らに向って何かいいたくなったのです。いわば君らの若々しい青春の気が、老人の僕を若返らせたのです。」「あせっては不可せん。頭を悪くしては不可せん。根気ずくでお出でなさい。世の中は根気の前に頭を下げる事を知っていますが、火花の前には一瞬の記憶しか与えてくれません。」「牛は超然として押して行くのです。何を押すかと聞くなら申します。人間を押すのです。文士を押すのではありません。これから湯に入ります。」

○八月二十八日　夏目金之助宛

「今日は、我々のボヘミアンライフを、少し御紹介致します。今居る所は、この家で別荘と称する十畳と六畳と二間つゞきのかけはなれた一棟です」「修善寺の御病気以来、実際、我々は、先生がねてお出でになると云ふと、ひやひやします。先生は少くとも我々ライズィングジェネレエシヨンの為めに、何時も御丈夫でなければいけません、これでやめます。」

＊岩波文庫『漱石書簡集』三好行雄「解説」

「漱石と芥川龍之介との関係は、先生と〈私〉を暗喩として語ることができる、というのがわたしのひそかな仮説である。」

○八月三十一日　蔭山蕉雨宛

「一宮館では、君の紹介状の奏効てきめんで一番いい座敷へはいれた。」「九月の四、五日に東京へかえつた僕を訪問して見給え。」「秋は、すでに至る所にある。弘法麦にも浜菅にもある。あるいは青く天際に簇つている海雲にもある。僕はその中に立つて朝ごとに独小便をする。砂の上を払う秋風が、その小便を吹きちらさない事はほとんどない。ちらされた小便にぬれて慌しく蟹がはい出すのを見た事さえある。——とにかく、もうどこも淋しい」

○八月二十五日　一の宮から　塚本文宛　一の宮海岸一宮館にて

「文ちゃん。

僕は　まだこの海岸で　本をよんだり原稿を書いたりして　暮してゐます。」「夕方や夜は　東京がこひしくなります。」「貰ひたい理由はたつた一つあるきりです。さうして　その理由は僕は　文ちやんが好きだと云ふ事です。勿論昔から　好きでした。今でも　好きです。その外に何も理由はありません。」

○『袈裟と盛遠』（大七・四）

○『世之助の話』（大七・四）

「成程一人は一夜中一しょに語りあかした。一人は僅の時間だけ、一つの舟に乗つてゐたのに過ぎない。が、その差別は、膚下一寸でなくなつてしまふ。」「私は右の耳に江戸清掻きの音を聞き、左の耳に角田川の水の音を聞いてゐるやうな心もちがした。さうしてそれが両方とも、同じ調子を出してゐるやうな心もちがした。」

○『蜘蛛の糸』（大七・七）

大正八年五月、約半月長崎から関西をまわる。長崎医専の斎藤茂吉を県立病院に訪ねる。九月、一〇日夕方、大正八年六月岩野泡鳴を中心とする「一〇日会」で秀しげ子と初めて会う。「一〇日会」に行き、恐らくこの後も秀しげ子と会い、密会の連絡をしたと思われる。一二日、「愁人」（秀しげ子）のことを思う。

○『鼠小僧次郎吉』（大九・一）

○『尾生』（大九・一）

「尾生は橋の下に佇んで、さつきから女の来るのを待つてゐる。」「が、女は未だに来ない。」「が、女は未だに来ない。」「が、女は未だに来ない。」「が、女は未だに来ない。」「が、女は未だに来ない。」「昼も夜も漫然と夢みがちな生活を送りながら、唯、何か来るべき不可思議なものばかりを待つてゐる、丁度あの尾生が薄暮の橋の下で、永久に来ない恋人を何時までも待ち暮したやうに。」

○『南京の基督』（大九・七）

大正十年三月～七月中国旅行

○『薮の中』（大一一・一）脱稿は一二月二〇日以前

長崎再訪。四月～五月、六月一日鎌倉経由長崎から田端に帰宅。

○「長崎日録」元版全集文末（大一一）

五月二十二日　戯れに照菊に与ふ。

　　萱艸も咲いたばつてん別れかな

○『お富の貞操』（大一一・五、後編九）

○『庭』（大一一・七・一）脱稿は六月二〇日頃

この後、『小説』の第一回の屋形船体験があって、その一ヶ月の間に、

○『六の宮の姫君』（大一一・八・一）脱稿は七月二〇日頃

○『魚河岸』（大一一・八・一）脱稿は七月二〇日頃

○「森先生」（大一一・八）

「又夏目先生の御葬式の時、青山斎場の門前の天幕に、受付を勤めし事ありしが、霜降の外套に中折帽をかぶりし人、わが前へ名刺をさし出したり。その人の顔の立派なる事、神彩ありとも云ふべきか、滅多に世の中にある顔ならず。名刺を見れば森林太郎とあり。」

『小説』は、「森先生」の原稿を渡した直後、第二回目の屋形船という、書き出しのあったかもしれない仮構の屋形船体験となる。

3　『小説』以後、彷徨のテクスト

次に『小説』の時空間以後のテクストをたどる。つまり、以後、大正一一年七月二七日、小穴隆一と我孫子の志賀直哉を訪ねる。八月一

三日『沙羅の花』出版、九月八日二科展に小穴隆一「白衣」招待日。
大正十二年九月一日の関東大震災に遭遇してのち、自伝物は、
○『少年』（大一三・四）
「保吉は食後の紅茶を前に、ぼんやり巻煙草をふかしながら、大川の向こうに人となった二十年前の幸福を夢みつづけた。」「保吉の四歳の時である。彼は鶴という女中といっしょに大溝の往来へ通りかかった。」
大正一三年夏、七月二二日八月二三日軽井沢体験。
○『大導寺信輔の半生――或精神的風景画――』（大一四・一）
「大導寺信輔の生まれたのは本所の回向院の近所だった。」
一ノ宮の夏の体験の小説化が行われる。
○『海のほとり』（大一四・九）
「……雨はまだ降りつづけていた。僕らは午飯をすませたのち、敷島を何本も灰にしながら、東京の友だちの噂などした。僕らのいるのは何もない庭へ葭簾の日除けを差しかけた六畳二間の離れだった。」「僕らは二人ともこの七月に大学の英文科を卒業していた。したがって衣食の計（はかりごと）を立てることは僕らの目前に迫っていた。」
「おまけに澪（みお）に流されたら、十中八、九は助からないんだよ」
Hは弓の折れの杖を振り振り、いろいろ澪の話をした。大きい澪は渚から一里半も沖へつづいている。――そんなことも話にまじっていた。」
「おい、M！」
僕はいつかMより五、六歩あとに歩いていた。
「なんだ？」
「僕らももう東京へ引き上げようか？」
「うん、引き上げるのも悪くはないな」
それからMは気軽そうにティッペラリイの口笛を吹きはじめた。」
八月二〇日夕から九月七日まで軽井沢。以後の上総体験も、
○『微笑』（大一四・一〇）
「僕が大学を卒業した年の夏、久米正雄と一緒に上総の一ノ宮の海岸に遊びに行つた。」「或暮方、僕等は一ノ宮の町へ散歩に行き、もう人の顔も見えない頃、ぶらぶら宿の方へ帰つて来た。道は宿へ辿り着くためには、弘法麦や防風の生えた砂山を一つ越えなければならぬ。」「当時僕等の借りてゐた、宿の離室（はなれ）に帰つて来た。隣室はたつた二間しかない。」「僕は縁側伝ひに後架の前に行き、」
○『蜃気楼―或は「続海のほとり」―』（昭二・三）
「僕は彼是十年前、上総の或海岸に滞在していたことを思い出した。同時に又そこに一しょにいた或友人たちのことを思い出した。」
鵠沼が舞台だが、湘南の鵠沼と外房の一ノ宮が「海のほとり」として同時に扱われたことは重要。
○『玄鶴山房』（昭二・一）
「彼の従弟は黙っていた。が、彼の想像は上総にある海岸の漁師町を描いていた。それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。

――彼は急に険しい顔をし、いつかさしはじめた日の光の中にもう一度リイプクネヒトを読みはじめた。

もはや自殺の決意があった中で、

○『追憶』（大一五・四～昭二・二）

「僕の記憶の始まりは数え年の四つの時のことである。」「曾祖父は奥坊主を勤めていたものの、二人の娘を二人とも花魁に売ったと言う人だった。」「僕は「つる」のことを「つうや」と呼んだ。」

○『点鬼簿』（大一五・一〇）

「僕の母は狂人だった。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。」

○『河童』（昭二・三）

「三年前の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負い、あの上高地の温泉宿から穂高山へ登ろうとしました。穂高山へ登るのには御承知の通り梓川を遡るほかはありません。」「すると、岩の上には画にある通りの河童が一匹、片手は白樺の幹を抱え、片手は目の上にかざしたなり、珍しそうに僕を見下ろしていました。」

歿後、

○『或阿呆の一生』二十一

「「もうどうにも仕かたはない。」

彼はもうこの狂人の娘に、――動物的本能ばかり強い彼女に或憎悪を感じてゐた。」

遺書の一節

「しかしその中でも大事件だつたのは僕が二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したことである。僕は罪を犯したことに良心の呵責は感じてゐない。唯相手を選ばなかつた為に（秀夫人の利己主義や動物的本能は実に甚しいものである。）僕の生存に不利を生じたことを少からず後悔してゐる。なほ又僕と恋愛関係に落ちた女性は秀夫人ばかりではない。しかし僕は三十歳以後に新たに情人をつくったことはなかつた。これも道徳的につくらなかつたのではない。」「今僕が自殺をするのは一生に一度の我儘かも知れない。」

二　文学的《上総》の光彩

1　文学的《上総》

○古事記の倭建命（やまとたけるのみこと）

「走水（はしりみず）の海を渡りましし時に、その渡の神浪を興し、船を廻して、え進み渡りまさざりき。しかして、その后、名は弟橘比売（おとたちばなひめ）の命

后の歌ひたまひしく、

さねさし　相模（さがむ）の小野（をの）に　燃ゆる火（ひ）の　火中（ほなか）に立ちて　問ひし　君はも

かれ、七日の後に、その后の御櫛海辺に依りき。すなはち、その櫛を

取りて、御陵を作りて、治め置きき。

そこより入り幸して、ことごとに荒ぶる蝦夷等を言向け、また山河の荒ぶる神等を平和して、還り上り幸しし時に……、

註「倭建命が上陸した上総（千葉県）側に、一週間後に比売の呪愚具であった櫛が流れついたと考えられる。」「そこより」の「そこ」は上総とみる。きみさらずときみつ。走水神社に弟橘比売を祀る。

時はるか下って、一一九二年、源頼朝征夷大将軍、鎌倉幕府の成立。

○能「七騎落」

「さても昨日石橋山の合戦に味方うち負け。余りに無勢に候程に。一まづ安房上総の方へ開かばやと存じ候。」

古い東海道は足柄峠を越え、相模の国府（大磯町付近）をすぎてからまっすぐ東へと進み、鎌倉を通って三浦半島にはいる。半島中央部の谷間を通過して東海岸に達し、浦賀・走水付近から東京湾口を舟で横断して対岸に上陸し、安房・上総・下総（ともに千葉県）・常陸（茨城県）と北上する。大井川　角田川と河川多く、アシ、ヨシ、マコモの、一大湿地帯を横切るよりも。やがて相模原の台地を横切り、多摩の横山の丘陵地帯を越えて武蔵の国府（府中市）へ。さらに武蔵野を東へ、隅田川・大井川を渡河して下総の国府に達し、南は上総・安房の国府につらなり、北は常陸国に至ってようやく終着点につく。それから先は「道の奥（みちのく）の国」である。

一一八〇年治承四八月末、房総半島安房国、箱根山から南に下って真鶴岬岩浦から脱出。連絡を受けた下総の千葉介常胤、上総介広常の援助を受け、大井・隅田を押し渡り十月六日鴨倉に入った。石橋山の敗戦の日から数えて四十余日。奇蹟の再起は房総が支えた。（「日本の歴史」中央公論社）

○万葉集

巻十四東歌三三四八

夏麻引く　海上潟の　沖つ洲に　舟は留めむ　さ夜更けにけり

右の一首は上総の国の歌。

相聞三三八二

馬来田の　嶺ろの笹葉の　露霜に　濡れて我来なば　汝は恋ふばぞも

三三八三

馬来田の　嶺ろに隠り居　かくだにも　国の遠かば　汝が目欲りせむ

右の二首は上総の国の歌。

○伊勢物語　東下り

「なほゆきゆきて、武蔵国と下総の国との中に、いとおほきなる河あり。それを角田河といふ。その河のほとりにむれゐて、乗りて渡らむとするに、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥

わが思ふ人は在りやなしやと」

○更級日記

「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、」

「門出して、いまたちといふ所にうつる。」「下総の国のいかだといふ所にとまりぬ。」

「人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見む

くろとの浜の秋の夜の月」

「武蔵と相模との中にゐて、あすだ川といふ、在五中将の「いざ言問はむ」と詠みける渡りなり、中将の集には隅田川とあり、舟にて渡りぬれば、相模の国になりぬ。」

松尾芭蕉

○「鹿島紀行」

「門よりふねにのりて、行徳といふところにいたる。やはたといふ里をすぐれば、かまがいの原といふ所、ひろき野あり。つくば山むかふに高く、二峯ならびたてり。」

○「奥の細道」

「去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やや年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえんと、」

島崎藤村

○『夜明け前』（第一部第三章）

「十一屋のあるところから両国橋まではほんの一歩だ。江戸の名残りに、隅田川を見て行かうなあ、と半蔵が言ひ出して、やがて三人で河岸の物揚場の近くに出た。早い朝のことで、大江戸はまだ眠りから覚めきらないかのやうである。」

森鷗外

○『キタ・セクスアリス』

「旧藩の殿様のお屋敷が向島にある。おとう様はそこのお長屋のあいているのにはいって、ばあさんを一人雇って、御飯をたかせて暮らしておいでになる。」

「向島からは遠くて通われないというので、そのころ神田小川町に住まっておられた、おとう様の先輩の東先生というかたの内に置いてもらって、そこから通った。」

○『妄想』

「目前（もくぜん）には広々と海が横たわっている。

その海から打ち上げられた砂が、小山のように盛り上がって、自然の堤防を形づくっている。アイルランドとスコットランドとから起って、ヨオロッパ一般に行われるようになったdünという語は、こういう処をさして言うのである。」「河は上総の夷しみ川である。海は太平洋である。」

夏目漱石

○『草枕』

「昔房州を館山から向うへ突き抜けて、上総から銚子まで浜伝いに歩行たことがある。其の時ある晩、ある所へ宿った。」「草山の向うはすぐ大海原でどどん〳〵と大きな濤が人の世を威嚇しに来る。余はとう〳〵夜のあけるまで一睡もせず、怪しげな蚊帳のうちに辛抱しながら、丸で草双紙にでもありそうなことだと考えた。」

○『こころ』

「二人は房州の鼻を廻って向う側へ出ました。我々は暑い日に射られながら、苦しい思いをして、上総の其所一里に騙されながら、うんうん歩きました。」

永井荷風

○『すみだ川』

「俳諧師松風庵蘿月は今戸で常磐津の師匠をしている実の妹をば今年は盂蘭盆にもたずねずにしまったので毎日その事のみ気にしている。」

○『澪東綺譚』

「吾妻橋をわたり、広い道を左に折れて源森橋をわたり、真直ぐに秋葉神社の前を過ぎて、またしばらく行くと車は線路の踏切でとまった。」

芥川龍之介（略）

堀辰雄

○『麦藁帽子』

「C県の或る海岸にひと夏を送りに行っていた、お前の兄のところから、思いがけない招待の手紙が届いたのだった。」「それはT……という名のごく小さな村だった。」

○『燃ゆる頬』

「私たちはその半島の或る駅で下り、そこから一里ばかり海岸に沿うた道を歩いた後、鋸のような形をした山にいだかれた、或る小さな漁村に到着した。」

林芙美子

○『放浪記』

「窓外は愁々とした秋景色である。小さなバスケット一つに一切をたくして、私は興津行きの汽車に乗っている。土気を過ぎると小さなトンネルがあった。

　サンプロンむかしロオマの巡礼の
　知らざる穴を出でて南す」

「私は日在浜を一直線に歩いていた。十月の外房州の海は黒くもりあがっていて、海のおそろしいまでな情熱が私をコウフンさせてしまった。只海と空と砂浜ばかりだ。それも辺りは暮れそめている。こんな大自然を見ていると、なんと人間の力のちっぽけな事よと思うなり。遠くから、犬の吼える声がする。」

○『牡蠣』

「九十九里の浜辺は暗く寒むかつた。波の音は地鳴りのやうに、遠くなったり近くなつたりしてゐる。浪打ぎはまで八九町もある砂浜を歩

いて、袂が切れるやうな浜風の中を、二人は大声で話しながら行つた。」

○『女の日記』

「両国の駅へ降りると、柘植は稲毛までの切符を買つた。魚臭い、煤けた汽車だつたが、田舎へ帰つてゆくやうな愉しさだつた。硝子の暗い窓に柘植の顔が写つてゐる。それを見てゐるわたしの顔に気がついたのか、柘植は暗い窓の方を向いて笑つた。賑やかな灯、淋しい灯、いろいろな町や村が走つて過ぎてゆく。

稲毛は暗い海臭い町だつた。」

○「房州白浜海岸」

「外房まはりで、土気経由両国行きの切符を買つて、バスを千倉で降りたが、千倉、和田浦、江見、鴨川までは、日本のニースであらうか。明るくて、海の色に変化があつて、植物の色が鮮やかだ。素敵な風景だ。和田浦から見る仁右衛門島は絵のやうな眺めだつた。」

三島由紀夫

○『岬にての物語』

「房総半島の一角に鷺浦（もはやその名が示す鷺の群棲は見られないが）というあまり名を知られぬ海岸がある。類いない岬の風光、優雅な海岸線、窄（せま）いがいいしれぬ余韻をもった湾口の眺め、たたなわる岬のかずかず、殆ど非の打ち処のない風景を持ちながら、その頃までに喧伝されて来た多くの海岸の名声に比べると、不当なほど不遇にみえる鷺浦は、少数の画家や静寧の美を愛する一部の人士の間にのみ知られていて、その誰にとっても、不遇なままの鷺浦が愛の対象であったので世に紹介する労をとる人はなく、又知人にさえ洩らすまいと力めている人さえあった。」

「十一歳の夏を私は母と妹とで過ごした。」「そこに明るい松のながめと巌と小さな入江があり白い躍動して止まぬ濤とがあった。それは同じ無音の光景であった。私の目にはただ、不思議なほど沈静な渚がみえたのだ。私はふと神の笑いに似たものの意味を考えた。それは今の私には考え及ばぬほど大きな事、たとしえもない大きな事と思われた。」

伊藤左千夫

○「左千夫歌集」

砂原と空と寄合ふ九十九里の磯行く人ら蟻のごとしも　　九十九里に遊びて

○『野菊の墓』

「僕の家というのは、松戸から二里許り下がって、矢切の渡しを東へ渡り、小高い岡の上で矢張り矢切村といってる所。矢切の齋藤といえば、この界隈での旧家で、里見の崩れが二三人ここへ落ちて百姓になったうちの一人が齋藤といったのだと祖父から聞いている。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るような椎の樹が四五本重なり合って立っている。村一番の忌森で村じうから羨ましがられている。」

葉山修平

○上総、房総、千葉を舞台とした作品

初期『手』『バスケットの中の仔猫』、長編『終わらざる時の証しに』、

これを頭に「連作長編小説5部作」『傾いた季節』『わが一九四五年』『藁の中の七面鳥』『海のある町』、さらに『帽子と花束』『美の使徒』

○論究した芥川作品

『新しい文章作法』で芋粥・軽井沢日記・好色・虱・鼻・手巾・文章と言葉・蜜柑・薮の中・羅生門、『小説の方法』で河童・トロッコ・お富の貞操・好色・女体・手巾・ひょっとこ・蜜柑・薮の中・世之助の話・龍、『日本文学にみる笑い女性風土』で暗中問答・芋粥・お富の貞操・好色・将軍・鼻・薮の中・羅生門、『近代の短篇小説』でお富の貞操、『小説　芥川龍之介』となる。

○作家小説に『芭蕉曼陀羅』『芭蕉ものがたり』『小説室生犀星』『小説　芥川龍之介』『薔薇とペルソナ　小説三島由紀夫』『小説永井荷風』（絶筆）がある。

2　葉山修平の文学――詩から

二〇一六年八月二十八日、葉山の突然の死から顧みる。突然！、というのが未だ残る私の実感だった。

作家・葉山修平は、東京新聞の「わたしのわんぱく時代」（昭六一・八・二〇）に「竹馬で天下取り」と題して、「私は内房線五井駅から小湊鉄道で三十分ほどの馬立の産だが、昭和十七年に県立市原中学に入るまでの戸田小学校時代――大人を疎外した「自然」と「子供」だけの「遊びの世界」が、今でも、まぶたによみがえってくる。」と書き出している。

昭和十七年は私の生年であって、葉山はちょうど干支を一回り先に生まれた、同じく午年である。馬立は、上総の国分寺跡の近郊で更級日記の作者が任果てた父に伴われて旅立ちに先だって門出した「いまたち」というところもその近辺と思われる、今立ちは馬立ちに連合して、馬の市が立ったという地名うまたて、またて、に通じる。

その後期文学というべきか四十六歳の壮年期の文学というべきか。顧みられた葉山の故郷が、処女詩集『花と木魚』（一九九六年九月）の巻頭詩だった。（詩はいずれも本稿のモチーフからの抜粋）

○「ゆきてかえらぬ」一九七六・七「薔薇」創刊号

雪

竹の折れる音がする夜
籾殻のついた熟柿の皮を剥く
ほそい母の手の若い白さ
ひいやりと歯にしむ果肉

幻に白い蝶が舞う
菜の花の段々畑
校庭のぐるりのさくらが
ひらひらと舞い
私は七歳

てるこがほしい花いちもんめ
　かずおがほしい花いちもんめ
紺の袴に白い足袋の
匂いやかな森先生と手をつなぎ
南総の戸田小学校の昼のひととき
　　勝ってうれしい花いちもんめ
　　負けてくやしい花いちもんめ

蕗のとうの芽をだした
黒い土の土提に
涙ながし
抱き合った遠い日の夢
初めての深さに
底知れぬあたたかさに
永遠のやわらかさの中に

北国の空に白い雲がうかび
湖の藻が濃いかげをつくる
七月
思い出を小石に積んで
碑をつくる

〈咲いて散ったであろうのに
　花ではなかったという〉[1]
セーラー服のお下げ髪
術もなく
私は生きて

註1榊美智子。『季節はすでに』の女主人公か。「北国」は北海道。「湖」は駒ヶ岳山麓の大沼か。藤蔭道子「葉山修平年譜」の一九五三年、二十三歳。「七月十三日～三十日まで、北海道に旅立つ。」とある。葉山が体験した心中事件。

葉山の指導で発刊した各同人雑誌のグラビアに葉山の巻頭詩があり、『小吟集』『第二小吟集』『第三小吟集』（没後）となる。

○「南総馬立地方の元旦」二〇〇五・一「回游魚」1号

正月三が日の雑煮の用意は
男たちだけの仕事だ

浅間山（せんげんやま）の頂に大きな初日がのぞいて見え
まずはめでたく雑煮の祝い
わが馬立地方のむかしの元旦です

＊南総を流れる養老川を裾にした里山。海抜八十二メートル。その中に、九十九里を舞台とする、芥川「青春二夏」に関わる上総一ノ宮、一宮館を舞台とする小吟がある。『小説』（二〇〇三・一二）。

七十三歳前後。

○「海」二〇〇四・五「一宮館文庫」

海を見下ろす松林の丘は
木苺の花が白く咲き

渚に倒れこんだままの荒い息づきの接吻も
白い胸からこぼれる豊かな乳房の押しかえす弾力も
いまは目くるめく遠い記憶　返らぬ時のかなた

○「微笑」二〇〇六・五「一宮館文庫」

夏の終りの一宮海岸の砂丘にすわった二人からは
穏やかな海に浮かんでいる海水帽がみえ

――おーい　どうしたんだ？　久米！
わけもわからず龍之介もあとを追って駆ける

龍之介は微笑とともにつぶやいた
松林ではひぐらしが鳴いている

○「五月の祭」二〇〇七・五「一宮館文庫」

風かおる五月おわりの日曜日の午後は
九十九里一宮館での文学碑前祭だ
芥川龍之介の〈恋文碑〉に俳句が献じられ
歌人小高倉之助〈鍬型碑〉には短歌の短冊

○「夜の海」二〇〇七・三「だりん」

右手には太東岬が黒くのび
左手には犬吠崎の灯が遠く見える

近くに光る帯のような一すじの水流（みお）の流れ
漁師も魚も近づかぬ沖へとつづく急流だ

○「月の宴」二〇〇七・一一「だりん」

中秋の月を賞でるわれら九人　九十九里の砂浜に
＊（道真　俊寛　世阿弥　義経主従　曾我兄弟
額田王　仲麻呂　空海　定家）
海賊ならぬわれら九人　海に酔い　月に酔い
いざ酌まん　宴の酒　いざ語らん　雅びの友よ
月の都のかぐや姫の舞いをさかなとして

○「九十九里」二〇一一・八「一宮館文庫」八十一歳

朝まだき九十九里の浜辺に佇めば
左千夫が玉を拾っているのが
遠い風景のなかに小さく見える
かがみこんで拾うのは輝く真珠か
打ち寄せられた龍宮からの碧玉か
波は静かに寄せ静かに返し

天地(あめつち)を両分(ふたわ)けしたときの時がゆっくり流れる
やがて日が水平線のかなたから昇りはじめ
みるみる薔薇色に染めてくる空
茜色に映える海
やがて灼熱の太陽は天高く照りかがやき
あちらから龍之介と正雄が
麦藁帽子をかむり浴衣姿でやってくる

『花と木魚』にもどって、

○「みをつくし　少女に」一九九四・一「冬扇」六十四歳

それは遠い夏の日
疎らな松林のあいだから九十九里の海がみえる
松林のなかに道ともない道がほそぼそと通じ
木漏れ日がまだらな影をつくっている
やがて松林が尽きようとするところ
海岸線に沿うかたちに流れている小川にでる
〈これは一宮川へ注いでいるんです
あなたはスカートをちょっとつまむと
青い藻がやわらかくゆれる流れの中へ入っていった
セーラー服の白さが眩しく
ピケ帽の下からはみだすカールした髪がゆれていた

そこは太平洋　白い波が砂に寄せくる
右手のあちらが太東岬

〈あれが水脈(みお)　わかるでしょう
私はあなたの指の方向を辿ったが　それとわからなかった
〈岸から沖へ川のような一筋のはやい流れがあります
〈じゃあ　しばらくミオの流れにのって沖までゆくといいね
〈あめりかまで？　とあなたはいった
〈ええ　仰向けに寝ころんでね
〈鴎や信天翁(あほうどり)と友だちになるわけ？
あなたは悪戯っぽく私をのぞきこみながら
〈あたしなら　そのまま天まで行く

翌日――
あなたの死を私は知った
ミオに嵌まってそのまま流されていったということだったが
漂っていたスケッチブックには
〈海の涙になります〉
〈美しいこの世の思い出をありがとう〉
九十九里の浜辺に地曳きの唄がひびいていた
それは遠い夏の日――

＊「冬扇」は、「葉山年譜」に「千葉大学国語国文学会有志」。「睡蓮――おもかげに芭蕉連句を先立てて――」一九九四・七「渦」

ひとり濡れ縁に坐ってお茶を飲んでいると
心はとおく隠元のこころに連なり宋ひとの心になる

――ぽちゃんと幽かな音がしてわたしはカオスに包まれる
いや　カオスではない
流れともない流れだ
川かしら？　川ではない
快い温かさがわたしを包み　微かに潮のかおりがする
遠い記憶の中の母の匂い

薄ぼんやりとした明るさの彼方の岸に
乳母を従えた龍之介が流れを覗きこんでいるのが見える
さすればここは大川だ　川びらきの花火の音が聞こえはせぬか
ゆるゆると漂ってゆくあちらの岸の白壁のあたり

＊（白秋　春夫　犀星　辰雄も道造も　朔太郎）

ああ　わたしを浮かべている流れよ
無能無才にして一筋につながる空しさ
芭蕉よ　あなたはほんとうにこの一筋を辿ったのか
行く人とてない秋のたそがれの道を
永遠のように　無明のように　あなたの一筋の流れはつづき
あなたの行く道の果てには
ただ茫々たる枯野がひろがっているばかり

桜をかざした西行の後姿が幻のようにかなたに見える
と　わたしの体はみるみる透明な何かになって
流れに溶けてゆく気配
形あるいのちの最後の祈りが　おかあさん　と叫び
その声に応えるように響いてくる微かな音――

＊（幼少年期のセックス体験から戦後、天女へ）

するといつの間にか睡蓮の花びらに籠っているわたしが
こちらの濡れ縁にいるわたしを見ていることの不思議さ
ひとときの至福の時が流れ
爽やかな初夏の風が永遠のようにわたってゆき
あちらの藤の花房がゆれるともなくゆれている

葉山の生誕の覚えは、『小説』中の芥川生誕の記憶に重なる。葉山の後期文学、『薔薇とペルソナ　小説三島由紀夫』（二〇〇二・一一）を挟んでの第三部「彩色玻璃」（二〇二二、九～一二）で完結。

三　愛語―利生の道

「思い」は――、想い　念い　懐い　推い　憶い。

人の「思い」の忍ぶ山、愛語―利生の道は、ここ、文学的《上総》に集う知り人の上にあった。

芥川最晩年の「思い」は、小穴隆一『二つの絵　芥川龍之介の回想』から

わた　海　渡　線　わだ　海川ニマガリ入ル処
わたどの　廊下　わだち　輪立　車ノ輪　わたりがは
三途ノ川　みつせ河トモイフ

「君、僕はわたりがはといふ詞を知らなかった。こんないい詞があることはいままで知らなかった。僕は知らなかったよ。」

うっとりとなって斯う言っていた時の、ああもうつくしかった顔を、僕は僕の一生に於いてもうみることはないであろう。

○「東北・北海道・新潟」

羽越線の汽車中――「改造社の宣伝班と別る。……」

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはこころやすらはん。
垣ほを見れば「山吹や
笠にさすべき枝のなり。」

（「日本周遊」昭二・八「改造」）元版全集文末「（大正十一年五月）」

芥川は永遠の旅人だった。やすらいは、「わたりがは」を渡ったのだ。現世では、ひととき女と水と、《上総》の愛語・利生を葉山が、しつらえた。それは能の「摂待」にさも似た光彩だった。

エピローグ

現世の御名の安藤幸輔、葉山さん――。

『小説』中の「彼」＝芥川は、大川に浮かんだ船から岸に戻ることはない。「女」と「水」のモチーフは、遊女と大川、狂女と大川の日本文学の古典的伝承を引き出している。能「隅田川」の

武蔵の国と。下総の中にある隅田川にも。着きにけり……

思ひは同じ恋路なれば我もまた。いざ言問はん都鳥。いざ言問はん都鳥。我が思ひ子ハ東路に。ありや。なしやと。

葉山さん！　あなたは『小説』の中のテクスト以後ですが、芥川の「今春会の『隅田川』」（大一三・三）を、「彼」＝次郎吉の『思い』を通して、思い出させてはいませんか。冒頭の「大川の水」と同事として、その裏打ちに、「能」を共振させていた。あるいは無意識下にそうしていたと、この「卓話」をひきうけた私＝竹内は、利生に続く同事の「思い」を探り当てたのです。今年三月、隅田公園から白鬚まで桜狩りをさかのぼって、木母寺の梅若丸の墓に詣でました。狂女は生母のフクさんですね。

「武蔵野の草の靡いた中に一条の道」に「昔の日の光りはその向うに模糊たる人ざわめきを照して」いるのを。「華やかに寂び澄ました声」が聞こえてきます。「げにや人の親の心は」と。「日本人は皆、学ばずとも鑑賞の道を心得てゐる」という芥川の言葉は、女船頭＝おまんに遊女伝承のおもかげを誘います。隅田川を古都に移せば、能の「江口」に結んで、ワキの旅僧、江口の里に着き遊女江口の君の旧跡を弔い、昔、西行法師がここで、一夜の宿を断られ

　世の中を厭ふまでこそ難からめ仮の宿りを惜しむ君かな

と詠んだことを偲ぶと、

「月澄み渡る水の面に。遊女の謡ふ舟遊び。月に見えたる不思議さよ川舟を。泊めて逢ふ瀬の波枕。」と地謡がつづく。

東京大学の修士論文に「近代作家に与えた西鶴の影響」を提出した葉山さんは『世之介の話』を引きました。西鶴の好色物、『小説』の「右の耳に江戸清掻きの音、左の耳には隅田川の水音」が思われる。当然、芭蕉の「奥の細道」の

　ひとつやに遊女も寝たり萩と月

も響きます。愛語は文学的《上総》からの文学化です。『小説』は、「摂待」の「この摂待の利生にて空しくなりし兄弟を二度見ると。思ふべし」と、義経主従十二人は、作り山伏となって奥州へ落ちたが、佐藤館の山伏摂待を受ける。継信忠信の母老尼は、山伏接待を用意しました。孝標女の「あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方」に生まれた葉山さんは、上総から下総へ千葉大学に学び、武蔵国と下総の国の境を流れる隅田川を越えて東京大学の大学院を修め、やがて先輩英文科出の秀才、自殺した芥川を、隅田川の屋形船に摂待し、「愛語の利生」を『小説』に表した、それが私のリアルな遠い「思い」です。

これ以上、眠りをさまたげてはなりません。しかしここは、《上総》です。女将のしつらえた摂待の用意です。宴の席が待っています。

二〇一八年五月二七日　於・ホテル一宮館

文学的《上総》――いのちの文箱

――「卓話」余滴――

一　河童連想――水脈（みお）は葉山修平『小説芥川龍之介』に発し芥川・柳田・折口を経て森安理文に及び――（抜粋）

〈あれが水脈（みお）　わかるでしょう
私はあなたの指の方向を辿ったが　それとわからなかった
〈岸から沖へ川のような一筋のはやい流れがあります

葉山修平「みおつくし　少女に」

一宮海岸で学生時代出逢った少女が指をさした。遠い日の思い出。葉山修平『小説 芥川龍之介』は、「女はなかなかやって来なかった。大川の上に浮かべた屋形船に彼だけ残して、」と書き出される、全章、その一人残された彼＝芥川の、「思い」の連ねであった。

そう私は書き出し、「彼」が「屋形船の女に名を聞かれたとき自らを盗人鼠小僧次郎吉になぞらえて「次郎吉」だと答え、その女船頭を「おまん」と呼んだ。その「女」が、「ワタシャ九十九里アラハマソダチ」と謡うことは、実は、この後、上総一ノ宮の一宮館での「卓話」を導くことになる。

そうして今、「彼が長崎丸山で知った照菊への別れがたい思いを、

萱草（かんぞう）の咲いたばつてん別れかな

と短冊に託し、「水虎晩帰之図」と題して与えたことが回想される。この水虎――河童は、「彼」の心を形象化したものであり、同時に照菊の奥底に潜んでいるはずの女の情念を形象化したつもりでもあった。「そこにはまた、彼の母の狂気も込められたものということができた。」と記した。

さらに芥川の「雑筆」の「河童の考証は柳田国男氏の山島民譚集に尽くしてゐる。」を引き、芥川の「河郎の歌」から、

赤らひく肌もふれつゝ河郎のいもせはいまだ眠りてをらむ

を引き、また芥川の「柳田国男・尾佐竹猛座談会」から、『遠野の物語』五五「河に川童多く住めり。猿ケ石川殊に多し。」を引いた。

また、私は「折口信夫の河童信愛は骨肉に徹っている。」とし、「河童の話」から、

河郎の恋する宿や夏の月

と蕪村の句が引かれていることや、折口の「河童像」で「青森県北津軽地方の水沢の多い地方方言「お水虎」さまの祠の神像」をあげ、この元の祠に近い金木町は、亡き太宰治君の生れた処で今は水中の人となつて還って来ない。」という結びに、文庫本の「解説」の表題が「水中の友」であったということを偲んだのだった。

最後に森安理文『愛日』第四集の「透明な笑い」や、『道芝』から河童の存在の真偽は、「願望として存在してもらいたいということであろう。」とは、悠々迫るもので「折口の愛玩は河童。理文のそれは獅子だった」とした。

理文邸は上総の三門の鷗外別荘「鷗荘」の隣家にして太平洋の潮騒の宅だった。鷗外はここで『妄想』を書いた。

と記し、芥川の**青春の一の宮**を『海のほとり』につづったと解き、葉山の「みおつくし」からの「河童連想」を、

水脈（みお）をつくして、沖へ開いている。

死ではない、さらに生を、と。

と結んで閉じた。

（「陸」19、平三〇・七）

二　上総一の宮・三門――散歩二題（抜粋）

（一）《上総》の文学――芥川龍之介と葉山修平を求めて――

「卓話」は当日と後日にと二つの散歩を招来した。五月二七日、上総一ノ宮駅前発午前九時。八千代市「古典を読む会」の十人。現在「蜻蛉日記」再読中。駅前を右に、私の一宮商業高校教諭時代の伊藤家、地方裁判所、書店通り。青春の芥川が逗留した渡辺七郎家跡。大正三年八月七日小野八重三郎宛の「今ゐるうちは麻問屋で一の宮の町に数の少い瓦葺の一つだ」と作成した資料を皆で読んだ。また玉前神社では、八月三十日井川恭宛「町の中央に玉前神社と云ふ玉依姫の命をまつた社」「その左右に五六町づつ町が開展してゐるのだが　夕方散歩をすると沢蟹が砂地の往来をもぞ〳〵と這つてあるく程さびれてゐる」と、駅で一宮館のマイクロバスに乗って、一宮海岸へ、一宮館の庭、文学碑、離れ、ホテルでは商業高校の女生徒が茶の接待をしていた。碑前祭、私の「卓話」、宴席。帰途、リュック車中に置き忘れ、後日受け取り。

（「陸」17、平三〇・六）

（二）《上総外房》の光彩　愛語と利生の風土

――芥川龍之介と葉山修平から森鷗外・林芙美子へ――

六月二十四日（日）午前、雨がちで気を利かせた女将が、九時前からバスを差し向けてくれた。竹散歩会の第十四回、十一名。最初からバスで、ほぼ前回と同様に、大正三年の夏の芥川のゆかりを回る。玉前神社では雨の中、「卓話」の宴で知り合った宮司の案内をうけた。また一宮館では、女将の金沢悦子さんが「芥川恋文碑」、「小高倉之助歌碑」、「離れ」など案内くださった。一宮館の和昼食は、美味しかったと皆が口をそろえた。

昼食前の二十分、女将にいただいた「卓話」の折りの資料の概略、大正五年八月二十一日井川恭宛の

「一の宮の自然は rough な所がいい Dune なんぞアイルランドのものにかいてあるやうなのがある。

砂にしる日のおとろへや海の秋」

夏目漱石宛、漱石からの来簡、さらに、いただいた塚本文宛などの話は、すこし講演調になってしまった。

午後一時半、三門。こちらはさながら実地調査のような散歩になった。雨は晴れ上がって熱いほどの日差し。森鷗外『妄想』の舞台「鷗荘」跡の日在の丘を散策。「目前には広々と海が横たわっている。その海から打ち上げられた砂が、小山のように盛り上がって、自然の堤防を形づくっている。アイルランドとスコットランドとから起こって、ヨオロッパ一般に行われるようになった dûn という語は、こういう処を斥して言うのである。」「すわっているのは、東の方一面に海を見晴らした、六畳の居間である。河は上総の夷隅川である。海は太平洋である。」「只朝凪の浦の静かな、鈍い、重くろしい波の音が、天地の脈搏のように聞こえているばかりである。」を心に。

三門の無人駅頭で読んだ、於菟『父親としての森鷗外』、類『鷗外の子供達』、小堀杏奴「晩年の父」の一節や、林芙美子『放浪記』の「燈火がつきそめて手前は桑畑。チラリホラリ藁屋根が目についてくる。私はバスケットをさげたままぼんやり駅に立つてゐた。」の一節が、残像のように残っていた。さらに、太平洋に一直線に白波を立てる日在の浜で、しゃごんで、芙美子の「私は日在浜を一直線に歩いてゐた。十月の外房州の海は黒くもりあがつてゐて、海のおそろしいまでな情熱がわたしをコウフンさせてしまつた。只海と空と砂浜ばかりだ。それも暮れそめてゐる。この大自然を見てゐると、なんと人間の力のちつぽけな事よと思ふなり。」、さらに防波堤に一列に並んで、高橋惠子「海の国から　鷗外と芙美子」を読む。「ウンテルデンリンデンのブランデルリンデン門前の筆者」の写真、「鴎外が晩年に人生を振り返った海の国から故国の期待のなかに留学した大都へ、私はそぞろ隔たりの在る二つの国をみつめることとなった。海の手前の夷隅川に泊まる小舟も、葦にそよぐ風を受けてきしむ。あちらこちらから顔を覗かせすぐ隠れるカニの饗宴。浜防風の磯の香り。夜に響く海鳴りの音。夜の闇に弾ける波の白さ豪快さ。打ち上げられた木々や、海草。」とともに、「日在の海よりのぞむゆかりの地、むかって左　森鷗外　右林芙美子」とある筆者撮影の写真を潮に、私達は、後ろの日在の丘を振りかえった。「この海の国で、人生を築き上げた文豪が悠久の時を考え、人生に迷っている娘が生のひととき癒をえた。私といえば二十一世紀を視野に、人生の中途に在ることだけは確かである。

冷ややかに現（うつつ）のあると見るときぞ海に語れるドラマふと止む」

迷っている娘は芙美子。冷ややかにある現（うつつ）とはと聞かまほしけれ。

（「陸」20、平三〇・一二）

堀辰雄と私

――能・「離見の見」への道――

＊章段のみ記す。

一　『堀辰雄の文学』のことなど

二　堀辰雄と能・「離見の見」

（一）芥川龍之介と堀辰雄における能・「隅田川」

（二）堀辰雄の日本古典ノオト

（三）おもかげという「距離」

（四）「離見の見」

（「芸術至上主義文芸」44、平成三〇・一一）

結

前第五十五号の「ロマンの世界化／世界化のロマン」は郷里の北海

道室蘭市で行った講演を中心に据えるものであった。これに並んで、本号は千葉での「卓話」を論文化し、上総一ノ宮、さらに三門の散歩を展開したものとなった。

いよいよ、「日本文学持ち歩き」は、越し方を生きた自分とは何か、行く末を生きる自分とは何かへの問いに集約されはじめた。

キーワード　芥川龍之介　葉山修平　上総　愛語・利生　堀辰雄